

明治期における擬音語・擬態語の漢字表記

佐藤 有紀*

一 はじめに

本稿は、明治三五年の「東京朝日新聞」を資料として、当時の擬音語・擬態語の表記体系の一端を明らかにすることを目的としたものである。

まずは、資料とした新聞記事例をお読みいただく。以下は、明治三五年五月一九日、第五面「大相撲評判記」と題された記事からの一部引用である。ただし漢字は新字体に改め、踊り字「く」は該当する仮名に直してある。

▲友綱部屋の様子

を一寸のぞいて見れば同部屋のいつも乍ら賑やかなのに驚かれる昨日ハ日曜であつた丈に最良客の面々も犇々と詰め掛けて居るやがて前相撲の稽古が済んで土俵があくとそこへ新来の珍客尾車部屋の荒岩がやつて来た居合た一同の者ハヤア荒閑々と持て囃すので荒も例の愛嬌をふりまき乍ら禪を占め直して

「さあ太刀山一丁行かう」と挑む太刀も心得て土俵へ上り念入りに仕切て立上ると一寸突き合て左四つ太刀ハ懸命に踏張て動くまいとするのを荒ハ一寸引いてヒタヒタと寄進み太刀の耐へる鼻を専売の足癖で寄り伏して仕舞つた太刀ハ残念といふ見得で再び戦ひを挑むと荒ハ莞爾として土俵へ上り念入に仕切た（傍線筆者）

右の引用記事からだけでも、助詞「は」の片仮名表記（例、二行目「昨日ハ日曜であつた」）、句読点の欠如、促音表記の不統一（例、八行目「仕舞つた」と九行目「仕切た」）等、現在とは異なる、当時の表記特徴が見出せる。擬音語・擬態語に関しても、当時の表記体系は現在とは異なっていたことが推測される。

例えば引用記事中には、傍線を付した「犇々」、「ヒタヒタ」、「莞爾」という三語の擬態語が現れているが、うち「犇々」と「莞爾」の二例では、現在では見られない「漢字表記＋振り仮名」という表記法が用いられている。

本稿では、このような漢字表記された擬音語・擬態語に特に着目し、

* さとう・ゆき、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程在学中、日本語学

その特徴について論じてゆきたい。

二 資料

今回資料としたのは、明治三五（一九〇二）年五月一〇日から六月九日まで（記事構成が異なる六月二日を除外）の「東京朝日新聞」三〇日分である。ただし、一般記事とは性質の異なる広告部分および短歌、漢詩欄は調査対象から除外した。

なお本稿では次のような用語に従う。本稿における擬音語・擬態語の擬音語とは、「電車がごとごと走る」など「外界の音を我々の使っている発音で写す語」。擬態語とは「彼はのろのろ歩く」など「動作の様子や物事の状態を我々の発音によっていかにもそれらしく写す語」を指す。ただし擬音語のなかで、「あつはつはと笑う」「猫がにやーにやー鳴く」など、人や動物の口から発せられる声の模写について、特に区別して用いる際には「擬声語」と呼ぶ。またその場合には「擬声語」「擬音語」「擬態語」と鉤括弧付きで記述する。

三 問題の所在

これまで複数の先行研究が、「婉然」^{〔にんじやう〕}「悄然」^{〔しやうぜん〕}等、明治期における擬音語・擬態語の「漢字＋振り仮名」表記の存在を指摘している。例えば太田絃子（一九九四）^{〔1〕}では、「明治期の文献を見ると、漢字に付けられた振り仮名が擬声語（筆者注、擬音語・擬態語のこと）である漢字表記が目

につく」と述べられている。

だが、太田等これまでの主な先行論は、一人あるいは複数の作家の漢字表記法について考察したものが主であり、文学作品に限らない当時の擬音語・擬態語の漢字表記全般に目を向け、共時的な体系を明らかにした研究は管見の限り存在しない。また、荒尾禎秀（一九八八）^{〔3〕}が『如鬼如鬼（ニヨキニヨキ）』『瓦落瓦落（ガラガラ）』の類など、和語を漢字表記した擬声語・擬態語（筆者注、擬音語・擬態語のこと）は結構ある。その研究は少しずつ進んできてはいるが、まだ辞書の形になるにはほど遠い」と述べている通り、量的にもまだ充分と言えない研究分野である。

明治期の擬音語・擬態語の漢字表記は、文学作品に限った特徴という訳ではなく、当時広く行われていたものである。例えば先に引用した「大相撲評判記」記事中にも、「犇々」^{〔ひしひし〕}「莞爾」^{〔にっこり〕}という漢字表記例が現れている。だが同時に、「ヒタヒタ」は片仮名、「犇々」^{〔ひしひし〕}「莞爾」^{〔にっこり〕}は漢字表記、という表記の書き分けも注目すべき点である。

このように、擬音語・擬態語の漢字表記については、いかなる時に漢字で表記されるのか、仮名表記との区別はどうなっているのかという問題がある。

さらに従来では、天沼寧（一九八六）^{〔4〕}が「擬音語・擬態語も、漢字書きが多く見られる」と述べるなど、擬音語・擬態語を一緒くたにして扱う傾向があり、擬音語と擬態語との漢字表記される度合いに差異はないのか、などの観点からの詳細な検討も不十分である。

この分野の研究の遅れの原因の一つには、当時の振り仮名と漢字表記の対応の複雑さがある。岡本勲（一九八八）^{〔5〕}が述べている通り、「明治三

○年代から四〇年代へかけての時代では、世間で表記の習慣は大まかにきまっていたとしても、ゆれの幅が大きく、可塑性が⁶あり、「書き手の好みによって自在に書き方に個性を出すことができた」。さらに、築島裕（一九六〇）が述べるように「どんな漢字の訓としても定まっていない類」の副詞である擬音語・擬態語には規範となる決まった漢字表記が存在しないため、特に自由に漢字表記されていた。それゆえ、従来明治期の擬音語・擬態語の漢字表記に着目する場合、前出の太田（一九九四）⁷が「戦前の小説等を読んでいると、擬声語（筆者注、擬音語・擬態語のこと）が振り仮名つき漢字で書かれていて、興味をそそられる」と述べるなど、その多種多様性、面白さに目が向けられる傾向が強く、同時代的に広く通用する共通性を見出し論考しようとする試みが後回しにされていたのである。

そこで本稿では、明治期の新聞媒体から採取された擬音語・擬態語の表記分類を通し、仮名と漢字との表記区分、擬音語と擬態語間の相違、といった点を通し、当時の擬音語・擬態語の漢字表記体系化の可能性について論じてゆきたい。

四 語の種類と表記

ここでは、「擬態語」であるのか「擬音語」であるのか、あるいは「擬声語」であるのか、という語の種類と、表記の関わりについて述べる。

調査資料とした三〇日分の「東京朝日新聞」から、延べ六九一語、異

なり二九八種の擬音語・擬態語が採取された。それらを「擬声語」「擬音語」「擬態語」の種類別に表記分類したのが次頁の表一である。

現在の擬音語・擬態語表記には平仮名と片仮名が共に用いられているが、武部良明（一九八二）⁷等により、擬態語に比べ、音、声を表す「擬声語」「擬音語」の場合に、より多く片仮名書きがなされる傾向にあることが明らかにされている。その理由として武部は、「（擬声語」「擬音語」に）何ゆえ片仮名が用いられるかというと、片仮名のほうが平仮名よりも表音性が強いからである。……擬態語のほうは、耳に聞こえる音をそのまま写すという意識がないため、一般には平仮名が用いられている。その点では、擬声語よりも擬態語のほうが言語的である」と述べ、「耳に聞こえる音を写すという意識」を挙げている。

「擬声語」と「擬音語」は、ともに音を表す語である。だがこれまで多数指摘されている通り「擬音語」のなかには音を伴うのかどうか曖昧な語も多く、「擬態語」との区別が非常に困難な場合も多い。

一方「擬声語」に属する「わんわん（犬の鳴き声）」「ぎゃーぎゃー（人間の泣き騒ぐ声）」などは、生き物の口から実際に発せられることもあり、確実に音を伴う、という実感をさらに強く与える。そのため、「人間や動物の声」である「擬声語」と「その他の物音」を表す「擬音語」とでは、表記特徴に相違が出るのではないかと考え、ここでは「擬声語」「擬音語」「擬態語」と三つに分類して考察する。

なお表一では、文脈からの判定が不可能な場合には、「擬音語」と「擬態語」両者に重複させて数えているため、合計数が延べ数合計の六九一

より多くなっている。なお表中の「平仮名」表記には、「はッははは」など、促音部分のみが片仮名表記される「平仮名、片仮名交ぜ書き」を含む。この「交ぜ書き」は出現数が少なく、「擬声語」中三例、「擬音語」中一例、「擬態語」中二例で、計六回、〇・八%の出現率になっている。

表一から分かるように、「東京朝日新聞」では全体数の約一八・七%にあたる一三六例が漢字表記されている。現在では田守育哲（一九九三）が、擬音語・擬態語と「延々」「人々」等の反復形を区別する一つの方法として、「オノマトペ（筆者注、擬音語・擬態語のこと）は通常『ボンボン』『ぴかぴか』のように、片仮名ないし平仮名で表され、漢字で書かれることは決していないが、反復形の漢語や和語は『炎々』『赤々』のように、漢字で表される」（傍線筆者）と述べている通り、擬音語・擬態語の漢字表記はほぼ消滅したものであるとして捉えられている。ところが表一から、「擬音語・擬態語は仮名表記するもの」という現代の我々が持つ暗黙の了解は、明治三五年当時には全く通用しないことが分かる。だが同時に、明治期においても漢字表記が最も多いという訳ではなく、片仮名表記が過半数を超えているという事実も明らかになった。

玉村文郎（一九八八）¹⁰によると、尾崎紅葉の『多情多恨』では全擬音語・擬態語のうち七三・八%、幸田露伴『五重塔』では三六・八%が漢字表記されている。また、太田絃子（一九九四）¹¹（一九九二）¹²からは、二葉亭四迷『浮雲』の擬音語・擬態語の漢字表記率は二〇%近く、同じく『平凡』では四〇%を超えることが明らかになっている。

ここから、現代と比べると非常に特徴的と思われる「東京朝日新聞」の漢字表記も、同時代のなかでは全く特異ではないことが分かる。また

表一 語の種類別に見た表記

合計	漢字	平仮名	片仮名	
83 (11.4%)	0	22	61	「擬声語」
57 (7.8%)	8	7	42	「擬音語」
587 (80.7%)	128	158	291	「擬態語」
727 約100%	136 (18.7%)	187 (25.7%)	394 (54.2%)	合計

『多情多恨』の七三・八%という高い漢字表記率から、前掲玉村（一九八八）¹⁰は紅葉について、「（紅葉は）音象徴語（筆者注、擬音語・擬態語のこと）の漢字表記に対するなみなみならぬ意欲があったと見られ」と結論付けている。

一方「東京朝日新聞」では、一八・七%と、紅葉作品に比べて、漢字表記率は格段に低い。筆者は、「東京朝日新聞」には複数の書き手が存在し、また毎日大衆に向けて発売される新聞媒体であるゆえに、技巧的すぎず、日常語のサンプルの採取に適しているのではないかと考えた。この尾崎紅葉、二葉亭四迷等の文学作品と比較した際の漢字表記率の低さも、「東京朝日新聞」の、日常語サンプルとしての有効性の裏づけになりうるのではないだろうか。

次に語の種類ごとの表記差を見る。表一から全一三六の漢字表記例のうち、一二八例が「擬態語」に現れていることが分かる。これは漢字表記全体の九四・一％にあたる。一方「擬音語」における漢字表記は、五七例中八例であり、更にその八例は「囁々^{わやわや}と詰掛ける」「憂然^{からり}と落ちたり」等、いずれも文脈により「擬態語」としての用法を持ちうる語である。加えて「擬声語」における漢字表記は八三例中皆無であることから、純粹に音のみを表す語には、漢字表記は全く用いられていないことが明らかになった。

こうした現象が現れるのは、仮名が表音文字で漢字が表意文字であることに関わっていると察せられる。前述した通り、現在では擬態語に比べ擬音語の方がより多く片仮名表記されており、「擬音語は片仮名書き、擬態語は平仮名書きが基本」という原則が一応は存在する。またそれに対する武部良明（一九八二）の考察（「擬声語」「擬音語」に）何ゆえ片仮名が用いられるかという点、片仮名のほうが平仮名よりも表音性が強いから^①についても既に前掲した。

だが表一から明らかなように、明治期の「東京朝日新聞」においては、「擬声語」「擬音語」「擬態語」のすべてで片仮名表記数が平仮名表記数を凌駕しており、現在とは様相が異なる。実際、先に引用した記事中でも、「荒ハ一寸引いてヒタヒタと寄進^{きしん}み」と擬態語の片仮名表記実例が現れている。

この「東京朝日新聞」における片仮名表記の優位性は擬態語に限られた現象ではない。前掲の記事の引用箇所にも見えた助詞「ハ」、「ヤア」

等の感動詞をはじめ、現在では平仮名表記が自然だと考えられる語が片仮名表記されている例は枚挙に暇がない。またこの片仮名の優位性は「東京朝日新聞」のような新聞媒体に限られた特徴ではない。例えば玉村文郎（一九七四）^②は明治初期の「戯作文学」について、

応答詞や感動詞、接続助詞の「ト」、終助詞の「ヨ」、擬声語、外来語などを「片かな」で表すほか、引き音節を示すために「イ」「ア」などを用い、促音を「ツ」で表わしたりするほか、文中で強調される特定語句をもしばしば「片かな」によって示すという表記慣習がとられている。

と述べており、当時広く用いられた表記法であることが顕著である。

つまり明治期には、片仮名表記と平仮名表記の使い分けに対する現代のような書き分け意識はまだ生じていなかったことが分かる。擬音語・擬態語も例外ではない。実際今回の調査資料のなかには、「ホロリホロリと泣き沈む」「ハラハラと涙をこぼし」など、現在では平仮名が自然と考えられる語が片仮名表記されている例が見出せる。その代わりとして、表音文字である仮名と、表意文字である漢字との間に、別の書き分けの意識が存在していた事実が見える。

実際に声や音を表す「擬声語」や「擬音語」であるなら、表音文字である仮名を用いた方が直接音として伝わりやすい。それゆえ漢字表記がなされなかったと考えられる。一方総出現数の約二一・八％が漢字表記されている「擬態語」は、直接音を表す訳ではないため、「擬声語」・「擬音語」に比べて理解されにくい場合がある。現在でも玉村文郎（一九八

九)¹³⁾によって、「音声による描写の間接性がある」擬態語の方が日本語学習者にとって理解がより困難であることが指摘されている。そのため「東京朝日新聞」では、表意文字である漢字をあてることにより、擬態語の意味をより分かりやすく伝え読者の理解を助けようとしたのではないかと察せられる。

本節の語の種類別の表記分類により、「東京朝日新聞」の擬音語・擬態語表記には表音性が強い片仮名表記比率が最も高いこと、また表意文字である漢字を用いた表記はその大半が「擬態語」に現れ、逆に「擬音語」には皆無であることが明らかになった。「擬態語」に対して特に漢字表記が好まれる理由については、第六節で考察したい。

五 語形と表記

本節では、漢字表記された擬音語・擬態語の振り仮名部分側に注目して、語形の面から漢字表記との関係を論じてゆく。ここでは振り仮名部分、つまり「淡泊^{あつさり}」であれば「あつさり」、「逡巡^{もたもた}」であれば「もたもた」側を分析の対象とする。表二は、資料とした「東京朝日新聞」中から採取された漢字表記された擬音語・擬態語の全用例を分類したものである。

表二の「語形」項は、漢字の文字数、また造語法別に用例を分けたものである。また「大漢語林」項に片仮名の読みが入っているものは、米山寅太郎・鎌田正著『大漢語林』に熟語として掲載されている語、同じく「大漢和」項に片仮名が入っている¹⁴⁾ものは、『大漢語林』には掲載されておらず、『大漢和辞典』にのみ掲載が認められる語である。なお、「大

漢語林」項の「(はた)国」¹⁵⁾「(ひしめく)国」は、「わが国だけに用いられる意味」を表わす「国訓」であることを意味している。次の「意味」項では、『大漢語林』または『大漢和辞典』に掲載されていた単漢字あるいは漢字熟語の意味が、振られている擬音語・擬態語の意味と一致していれば「○」、完全には一致せず、乖離が見られる場合が「△」、単漢字・熟語の字義と、対応する擬音語・擬態語の意味につながりが見出せないものが「×」となっている。

表二から、漢字表記された擬音語・擬態語の振り仮名部分の全異なり語数は、六六種であることが分かる。それを語形別に分けると以下のようになる。

漢字表記出現数一位の語形は「A B A B 型」(例「烟々」^{きんささ}「阿容阿容」^{あめあめ})で二四回、二位は「A ツ B リ 型」(例「落膽」^{がっかり}「迂闊」^{うっかり})の一六回である。以下は「A ツ 型」(例「嚇」^{おそ})七回、「A B リ 型」(例「晃」^{きら})三回、「A B 型」(例「礪」^{はた})、「A ツ B リ 型」(例「悄然」^{しんぼり})、「A ウ A ウ 型」(例「蓬々」^{ほうほう})、「A ツ B 型」(例「莞爾」^{にっこ})が各二回。「A B, A B 型」(「潜々」^{さめざめ})、「A ツ B 型」(「洵然」^{じんぷ})、「A ツ B A ツ B 型」(「発石発石」^{はっしはっし})、「A ツ A ツ 型」(「点々」^{てんでん})、「A ツ 型」(「号砲」^{ごうぽう})、「A 型」(「不」^ふ)、「A B C B 型」(「滅茶苦茶」^{めっちゃくちゃ})、「A A + A B C B 型」(「茶々無茶苦茶」^{ちゃちゃむちゃくちゃ})が各一回という結果になった。

以上から、漢字表記は、擬音語・擬態語の語形を限定せず、広く行われていることが認められる。

次の「語形別出現回数上位型」は、漢字表記されているかどうかは問わずに、「東京朝日新聞」から採取された全ての擬音語・擬態語の異なり語二九八種を語形ごとに分け、出現回数順に並べたものである。

語形別出現回数上位型

- | | |
|-------------------|---------------------|
| ① 「A B A B 型」 一一一 | ② 「A B リ型」 二六 |
| ③ 「A ツ B リ型」 二五 | ④ 「A ツ 型」 二〇 |
| ⑤ 「A ン A ン 型」 八 | ⑥ 「A B リ A B リ 型」 八 |
| ⑦ 「A B 型」 七 | ⑦ 「A ン B リ 型」 七 |
| ⑨ 「A ン 型」 六 | ⑨ 「A ウ 型」 六 |

以上のようになる。漢字表記された語のなかだけで見た語形別出現数と、全ての表記をあわせた全体の語形別出現回数とを見比べた際、目につくのは漢字表記数二位の「A ツ B リ型」の漢字表記率の高さである。全体の出現数に対する漢字表記の割合を考えると全二五種中一六種となり、過半数が少なくとも一度以上漢字で表記されているということになる。

一方漢字表記での出現数一位の「A B A B 型」は全一一中二四、三位の「A ツ 型」は二〇中七、四位の「A B リ型」は二六中三回となつていく。

「A ツ B リ型」の漢字表記率が全二五種中一六種、六四%と高い理由の一つとして、「A ツ B リ型」には「擬音語として用いられる語がほとんどない」(平弥悠紀、二〇〇一)⁽¹⁶⁾ ことがある。前節で上述した通り漢字表記は擬態語に多く、擬声語・擬音語の表記には仮名表記が好まれる傾向がある。そのため、擬態語が多く含まれる語形には必然的に漢字表記も多くなる。それゆえ「A ツ B リ型」の漢字表記率が高まったと言える。

「A ツ B リ型」の他には「A ン B リ型」も、そのほとんどが擬態語とし

て用いられると指摘される語形である。だが「A ン B リ型」は本稿の調査では全体で七語しか出現しておらず、漢字表記はその内二語であったため、サンプル数が少なく傾向を読み取ることができなかった。

山口仲美(二〇〇三)⁽¹⁷⁾ 等の指摘通り、「A ン B リ型」の隆盛様態は「A ツ B リ型」と類似した変遷を辿っている。だが、前島年子(一九六七)が「最も種類の多い型は言うまでもなく A B A B 型であり、次に多いのが A ツ B リ型である」と述べているように、日本語における「A ツ B リ型」の使用数が高いのと比較すると、「A ン B リ型」は歴史的にも、また小野米一他(一九九九)⁽¹⁹⁾ の調査から実証されたように現在の使用状況でも、その出現数は格段に少ない。それを裏付ける形で、今回の筆者の調査においても、「A ツ B リ型」の二五種に対し、「A ン B リ型」は七種しか採取されなかった。

逆に、前述の平(二〇〇一)⁽¹⁶⁾ が「擬音語としての用法をもつ語が多く含まれている」とする「Aー、A ツ、A ン、AーAー、A ツ A ツ、A ン A ン」型には漢字表記が現れにくいことが予想されるが、今回の調査では総出現数が少ないため、実証までには至らなかった。

擬音語・擬態語の語形別漢字表記出現数から明らかにすることは、漢字表記される語形は慣習的で、類型化が可能なものに限られることである。先に挙げた漢字表記語形は、「茶々無茶苦茶」の「A A + A B C B 型」⁽²⁰⁾、「潜々」の「A B A B 型」以外、皆異なり語が二種類以上現れた語形であった。「ちゃちゃむちゃくちゃ」は、「むちゃくちゃ」の変形である。この語は他にも派生形が多く、当時の国語辞典を見ると、現在でも用いる

漢字 2 字		悄悄	しおしお	4	ショウショウ		○	義
		繁々	しげしげ	1	×	×		義 訓
		徐々	そろそろ	1	ジョジョ		○	義
		艶々	つやつや	2	エンエン		○	義 訓
		点々	てんてん	1	テンテン		○	義 音
		森々	ひしひし	3	(ひしめく) 国			義 訓
		密々	ひそひそ	3	ミツミツ		○	義 訓
		密々	ひたひた	1	ミツミツ		○	義
		冷々	ひやひや	1	レイレイ		○	義 訓
		房々	ふさふさ	4	×	×	○	義 訓
		蓬々	ぼうぼう	1	ホウホウ		△	義 音
		弗々	ぼつぼつ／ ぼつぼつ	4	フツフツ		×	(音)
		緩々	ゆるゆる	3	カンカン		○	義 訓
		囂々	わやわや	1	ゴウゴウ		○	義
	双声	恍惚	うっとり	3	コウコツ		○	義
		躊躇	おどおど	1	チュウチョ		○	義
		吃驚	びっくり	3	キッキョウ		○	義
		喫驚	びっくり	4	キッキョウ		○	義
	畳韻	円満	ふっくり	1	エンマン		△	義
		彷徨	まごまご	1	ホウコウ		○	義
		逡巡	もたもた	1	シュンジュン		○	義
		蹢躅めく	よろ (めく)	1	ソウロウ		○	義
	その他の熟語	淡白	あっさり	2	タンパク		○	義
		乒乓	ひょろ (つき)	1	ヘイホウ		×	未
		薄紅	ほんのり	1	×	×		義
		無手	むず	1	×	×		音
		囁?	もがもが	1	ショウジュ		○	義
	送り仮名つき	迂闊り	うっかり	1	ウカツ		○	義
		悉皆り	すっか (り)	2	シツカイ		○	義
		肥満り	ぽっと (り)	1	ヒマン		○	義
		滅切り	めっき (り)	1	×	×		義 音 訓
漢字 3 字		嬌々然	にこにこ	1	×	×		義
漢字 4 字		阿容々々	おめおめ	2		アヨウ	△	義
		発石発石	はっしはっし	1	×	×		義 音 (訓)
		滅茶苦茶	めちゃくちゃ	1	×	×		音
		滅茶滅茶	めちゃめちゃ	4	×	×		音
漢字 6 字		茶々無茶苦茶	ちゃちゃ むちゃくちゃ	1	×	×		音
その他	送り仮名つき	摺れ摺れ	すれすれ	1	(する)		○	義 訓

表二 漢字表記された擬音語・擬態語の分類

語形		出現形	読み	数	大漢語林	大漢和	意味	借
漢字 1 字		嚇	かっ	1	カク		○	義
		屹	きっ	1	キツ		○	義 音
		屹（度）	きつと	1	×	キト	○	義 音
		昵	じっ	1	イ		○	義
		沈	じっ	3	チン		○	義
		熱	じっ	1	ジク		○	義
		窃	そっ	1	セツ		○	義
		密	そっ	1	ミツ		○	義
		礎	はた	2	（はた）国		○	義 訓
		不	ふ	2	フ		×	音
		不（図）	ふと	6	フト		○	義 音
	送り仮名つき	晃り	きらり	2	コウ		○	義
		確かり	しっ（かり）	1	カク		○	義
漢字 2 字	「一乎」	確乎	しっかり	3	カツコ		○	義
		茫乎	ぼっ	2	ボウコ		○	義
	「一爾」	莞爾	にこにこ	2	カンジ		○	義
		莞爾つく	にこ（つく）	1	カンジ		○	義
		莞爾	にっこ	3	カンジ		○	義
		莞爾	にっこり	1	カンジ		○	義
	「一然」	戛然	からり	1	カツゼン		△	義
		快然	さっぱり	1	カイゼン		○	義
		確然	しっかり	1	カクゼン		○	義
		悄然	しょんぼり	2	ショウゼン		○	義
		全然	すっかり	2	ゼンゼン		○	義
		洵然	ざんぶ	2	×	×		義
		断然	すっぱり	1	ダンゼン		○	義
		嫣然	にこり	1	エンゼン		○	義
		嫣然	にっ	1	エンゼン		○	義
		判然	はっきり	2	ハンゼン		○	義
		寂然	ひっそり	1	セキゼン／ ジャクネン		○	義
		偶然	ひょっ	1	グウゼン		○	義
		断然	ふつつり	1	ダンゼン		○	義
	畳語	戛々	がらがら	1	カツカツ		△	義
		炯々	きらきら	1	ギョウギョウ		○	義
		汲々	きゅうきゅう	1	キュウキュウ		○	義 音
		諄々	くどくど	1	ジュンジュン		○	義
		転々	ころころ	1	テンテン		△	義 訓
		潜々	さめざめ	1	×	センセン	△	義

「目茶目茶」「無茶無茶」、現在では方言のみに残る「和茶苦茶」「茶々苦茶」など、いくつも変形例が見出せる。また「A B A' B 型」の「さめざめ」は、「A B A B 型」の一部と考えることもでき、同時に擬音語・擬態語としては非常に稀な濁音化を起こしている語であり、擬態語と認定するか否かの判断は人によって異なる²⁰⁾。

以上の二例を除き、漢字表記される語形は、皆慣習的な語であると言える。例えば「アハアと皆々打笑ひ」（五月一三日、五面）（傍線筆者、以下同じ）等のように他に見慣れない語、「ニヤアゴと猫の候声」（六月一〇日、五面）等のように類型化できないような語形、「ヌウ||ツと這ひて単衣をぬぎ捨てゐる」（五月一七日、五面）等のように一回限りの臨時語形、強調語形には、漢字による表記は全く見られない。

本節から、漢字表記は慣習的な語形であれば様々な語形で広く行われていること、だがなかでも「A ツ B リ型」の漢字表記率が特に高いことが明らかにになった。また逆に強調語形や臨時語形等には漢字表記が全く見られないことにも言及した。類型化できる見慣れた語形にのみ漢字表記が現れるのはなぜだろうか。その理由については、前節と併せて次節で検討してゆきたい。

六 擬音語・擬態語と漢字表記の傾向

第四節では「擬声語」「擬音語」「擬態語」という語の種類と表記の関係性、第五節では語形と漢字表記率の関係性という側面から分析を進めた。繰り返しになるが、これまで分かったことを要約すると、漢字表記

は「擬態語」において圧倒的に多く見られることと、「A ツ B リ型」の漢字表記率が高く、逆に強調語形や臨時語形等は仮名で表記されることである。ここから本節では、いかなる語に対して漢字表記が選択される傾向が高いのかについて、総合的に考えてゆきたい。

寛壽雄（一九九三）²¹⁾と田守育啓（二〇〇〇）²²⁾は、「語彙化の程度」「語彙性の高低」という概念を用い、「あるオノマトペ語（筆者注、擬音語・擬態語のこと）が完全に純粹のオノマトペであるのか、それとも一般語彙に近いものなのか」を判断している。例えば寛（一九九三）²¹⁾では、「語彙化の程度」を判定する基準として、次の二点を導入している。

（一）引用性——引用として括弧内にはいるか、引用を示す助詞の「と」をとるかどうかが。

（二）語形変化——時制の変化を示す「活用」がみられるかどうか

寛によると、第一段階、つまり「完全に純粹のオノマトペである」段階「には、「ガビューン」などの「臨時形」の語が属する。また第二段階は『バサツと』『きちんと』など『と』を伴い、かつ『語形変化』をしないもの」がくる。次の第三段階は『と』が起らず、『語形変化』をなす類」である。そして例として「する形」をとる「びつくり（する）」「だ形」をとる「ふらふら（だ）」などを挙げている。最後の第四段階は、「注ぐ」「轟く」など、「語源的にはオノマトペであったものが、語彙化の程度が進んで、もう一般の語と区別されなくなったもの」である。この段階の語について、寛は「すでに母語話者にもオノマトペ語源という

意識がなく」と述べており、各辞書類や先行論でも擬音語・擬態語として扱われていない。また本稿でも調査対象から除外している。

さらに田守（二〇〇〇）⁽²²⁾は「音を表す」「引用的に用いることができる」「具体的な描写力がある」など、擬音語・擬態語の「語彙性」を計る八つの基準点を提示しており、これらの基準を多く満たしていればいるほど「オノマトペ度が高く語彙性が低い」と見なしている。このように、一口に擬音語・擬態語とは言うものの、そのなかには一般語彙に近いものから遠いものまで、線上に語が連続して存在している。

二人の論を参考に、今回調査対象とした範囲の擬音語・擬態語を語彙性の高低という基準で並べると、まず「擬態語」は、音を表す「擬声語」「擬音語」より語彙性が高い。また助詞「と」を伴わなくても良い語は、「春風さつと来りて」（六月三日、三面）の「さつ（と）」など、「と」の後接が必須である語より語彙性が高い。さらに「びっくり（する）」「ふらふら（だ）」のように述語に組み入れ可能な語は、組み入れ不可能な語に比べ語彙性が高い。また、定着して慣習的に用いられている語は、前出の「アハアと皆々打笑ひ」などの臨時的な語より語彙性が高いということになる。

第四、五節から明らかになったことと併せて考えると、漢字表記は、擬音語・擬態語のなかでもより一般語彙に近く定着度の高いもの、つまり、田守の言葉を借りると「語彙性が高いもの」に生じる傾向があることが顕著である。その最たるものが、現在では擬態語として扱うか一般語彙として扱うか判断の分かれる「はつきり」「ゆっくり」等、「Aッ

Bリ」型の一部のもの、ということになる。例えば西尾寅弥（一九八八）⁽²³⁾は『びっくりする』はすでに『おどろく』の単なる言いかえにすぎなくなっていて、……もはや語源的象徴語に近い」と述べている。そしてその「びっくり」は「一目見るより喫驚」⁽²⁴⁾（六月六日、三面）など調査資料中でも、全擬音語・擬態語中最多の計七例が漢字表記されているのである。

では、定着度が高く、一般語彙により近い擬音語・擬態語ほど漢字表記される傾向が強いのはなぜか。

その理由は副詞をはじめとする他の語彙との関わりにあるのではないかと察せられる。例えば初めに引用した記事中に、「荒ハ一寸（引いて）」という箇所が見える。筆者はこの「ちよつと」について、もはや擬態語とは言えず、一般語彙の副詞であると考え調査対象から除外した。天沼寧『擬音語・擬態語辞典』⁽²⁵⁾、山口仲美編『暮らしのことは 擬音・擬態語辞典』⁽²⁶⁾等でも「ちよつと」は立項目されていない。だが、浅野鶴子『擬音語・擬態語辞典』⁽²⁷⁾には、「ちよつくら」の同類語として索引に含まれている。この「ちよつと」は、調査対象の「東京朝日新聞」のなかで「一寸」⁽²⁸⁾「鳥渡」⁽²⁹⁾の二種類によって全出現例が漢字表記されており、仮名による表記は皆無であった。また、現在では平仮名表記が一般的と考えられる副詞の「少々」⁽³⁰⁾、「愈々」⁽³¹⁾も漢字表記が主であった。

擬音語・擬態語とその他の語、特に副詞との区別の困難さはこれまで多数の文献によって指摘されてきた。⁽³²⁾なかでも頻繁に問題になるのは、上掲した「ちよつと」「びっくり」「はつきり」など、定着度、使用頻度

が特に高い語彙である。前述したように、今回の調査で「ちよつと」はその全用例で漢字表記されていた。擬態語のなかでも「AツBリ型」、特に「びつくり」「しつかり」などの漢字表記率が高かったという本稿の調査結果は、語彙性の高い擬態語、そのなかでも特に一般語彙に近い形が、他の副詞等に引かれて漢字表記の選択がなされやすいということの表れではないかと考えられる。

一方上述した通り、引用記事中の「ヤア」をはじめとする感動詞は、「東京朝日新聞」中では「イエ」「ヘエ」等その大半が片仮名表記されている。また第四節で明らかになった通り、純粹に音を表す「擬声語」に対して漢字表記は全く用いられておらず、「擬音語」に好まれる表記は圧倒的に片仮名によるものである。ここから、前出の筧(一九九三)⁽²⁾等の述べる語彙性の低い語、つまり一般語彙から遠い擬音語・擬態語の代表である「擬声語」、また「アハア」「ヌウッ」などの臨時的な語は、逆に感動詞等の語群に引かれて片仮名表記がなされる傾向にあったのではないかと察することができる。

本節では、擬音語・擬態語の漢字表記を含む表記の選択が、擬音語・擬態語以外の一般語彙との関係から行われているという点に言及した。その際「語彙性の高低」という筧、田守の定義を導入し、「語彙性の高い、オノマトペ度の低い」擬音語・擬態語は他の副詞等の語群に引かれて漢字表記が選択されやすいこと。逆に「語彙性の低い、オノマトペ度の高い」擬音語・擬態語は感動詞等に引かれて片仮名表記がなされやすいことを明らかにした。

ここから、明治三五年当時の擬音語・擬態語の漢字表記は、全く個人

的、場当たりに用いられている訳ではなく、ある擬音語・擬態語が漢字表記されやすい傾向にあるのか、あるいは逆に仮名で表記されることが多いのかについて、体系化した上での推測が可能であることが指摘できる。

七 まとめ

以上本稿では、明治三五年度の「東京朝日新聞」から採取された擬音語・擬態語を対象とし、表記面からの分析を試みた。

本稿により、従来「擬音語・擬態語も、漢字書きが多く見られる」(前述、天沼寧⁽⁴⁾)など一括して言及されることが多かった明治期の擬音語・擬態語の漢字表記について、漢字表記が好まれやすい語の性質を整理し、その特徴の一端を明らかにすることができた。第六節で述べたように、当時の擬音語・擬態語の表記選択は雑多に行われていた訳ではなく、ある一定の選択の基準の下で行われている。今後採集する用例を増やすにつれて、今回決定付けることができなかった「AンBリ型」等の表記実態も明らかになれば、本稿の説をより堅固なものにすることが可能であろう。

また本稿では紙幅の関係上言及できなかったが、漢字表記された擬音語・擬態語に関する研究には、他に、あてられた漢字の面からの分析方法が考えられる。漢字面からの分析とは、本稿第五節とは逆に「淡白^{あつさり}」であれば「淡白」、「逡巡^{もたもた}」であれば「逡巡」側に着目する方法である。

例えば前掲の「表二 漢字表記された擬音語・擬態語の分類」の「出

現形」項を見てゆくと、「莞爾」の「莞爾」、「快然」の「快然」、「断然」の「断然」等、中国の漢語をそのまま取り入れた形で、語尾に「―爾」「―然」など接尾辞を伴う構成の語が見える。他にも「炯々」の「炯々」等の「疊語」型、「彷徨」の「彷徨」等の「疊韻」型など、漢語を取り入れた語のなかにも種々の語構成が現れている。あるいは「肥満り」等漢語に送り仮名の「り」を後接させたもの、「繁々」の「繁々」等漢和辞典には掲載されていないものなど、漢語をそのまま用いるのではなく、日本国内で創作されたと考えられる構成の語も複数採取されている。このような擬音語・擬態語の漢字表記に対する造語法について、今後重点的に考察を重ねてゆきたい。

さらに、同じく表二の「借」項を見ると、擬音語・擬態語である振り仮名部分とあてられた漢字との間にも、複数の関係性があることが明らかである。例として「吃驚」の「吃驚」と「びっくり」のように、音は関係せず、漢字の意味が反映されて組み合わせられている「借義用法」、「滅茶苦茶」のように、音が優先されて組み合わせられたと考えられる「借音用法」、「密々」等、漢字の訓読みと字義の両方が反映されていると考えられる「借訓・借義用法」など、その組み合わせは多種多様である。この漢字と、振り仮名である擬音語・擬態語の関係性に対する論考も次稿に譲ることにしたい。

本稿で論じた語の種類と表記の関係性、振り仮名である擬音語・擬態語側から見た語形と漢字表記の関係性と、今後進めてゆくあてられた漢字側からの考察を総括することで、当時の擬音語・擬態語の漢字表記体

系について、より明らかにしうるであろう。

さらに、同時代の辞書や文学作品への視野の拡大、近世との関係考察など、他にも複数の研究の方向性が考えられる。今後の課題としてゆきたい。

〔注〕

- (1) 太田絃子「『浮雲』の擬声語の漢字表記」(『就実語文』第一五号、一九九四年二月)
- (2) 佐藤なぎさ「一葉と鏡花の小説における擬態語・擬声語」(『中央大学国文』第三四卷、一九九一年三月)、天沼寧「擬音語・擬態語の漢字表記」(『大妻女子大学文学部紀要』一八、一九八六年三月)、鈴木雅子「擬声語・擬態語・擬音語」(『研究資料日本文法』四)明治書院、一九八四年九月)など。
- (3) 荒尾禎秀「擬声語・擬態語辞典」(『日本語百科大事典』大修館、一九八八年五月)
- (4) 天沼寧「擬音語・擬態語の漢字表記」(『大妻女子大学文学部紀要』一八、一九八六年三月)
- (5) 岡本勲「自然主義文学の漢字」(『漢字講座九 近代文学と漢字』明治書院、一九八八年六月)
- (6) 築島裕「宛字考」(『言語生活』一九六〇年七月)
- (7) 武部良明「擬声語・擬態語の書き方」(小川芳男他編『日本語教育事典』大修館、一九八二年五月)

- (8) 天沼寧「擬音語・擬態語」(『日本語教育』六八号、一九八九年七月)、小林英夫「国語象徴音の研究」(『文学』第一卷第八号、一九三三年一月)、山口仲美「擬態語」(佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院、一九七七年一月)、大谷洋子「擬態語の特徴」(『日本語教育』六八号、一九八九年七月)、大坪併治「象徴語彙の歴史」(『講座日本語学四 語彙史』明治書院、一九八二年一月)など。
- (9) 田守育啓「日本語オノマトペの音韻・形態的特徴」(『月刊言語』第二二巻第六号、一九九三年六月)
- (10) 玉村文郎「尾崎紅葉・幸田露伴の漢字——『多情多恨』と『五重塔』」(『漢字講座九 近代文学と漢字』明治書院、一九八八年六月)
- (11) 太田絃子『平凡』の擬声語の漢字表記」(『就実語文』第一三号、一九九二年一月)
- (12) 玉村文郎『かな』の位相——『多情多恨』表記考補遺」(『大阪外大学報 言語編』三〇、一九七四年)
- (13) 玉村文郎「日本語の音象徴語の特徴とその教育」(『日本語教育』六八号、一九八九年七月)
- (14) 米山寅太郎・鎌田正著『大漢語林』(大修館、一九九二年四月)
- (15) 諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館)
- (16) 平弥悠紀「現代語における擬音語のタイプについて」(『同志社大学留学生別科紀要』(一)、二〇〇一年一二月)
- (17) 山口仲美編『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』(講談社、二〇〇三年一月)。なお、「AッBリ型」「AンBリ型」を含む「擬音・擬態語の型——語形とその変遷」については、コラム二〇(五四一頁)を参

照した。

- (18) 前島年子「時代を通して見た擬声語・擬態語」(『東京女子大学日本文学』第二十八号、一九六七年三月)
- (19) 小野米一他「小学校国語教科書に見る擬音語・擬態語」(『鳴門教育学研究紀要(人文・社会科学編)』(第一四巻、一九九九年)
- (20) 「さめざめ」の問題については、山口仲美『平安文学の文体の研究』(明治書院、一九八四年二月)の三〇〇頁の注一七を参照のこと。他にも例えば秋元美晴「擬音語・擬態語の分析に基づく女性像の考察——音声・形態を中心に」(『惠泉女学園大学 人文学部紀要』第二号、一九九〇年一月)、宮地裕「擬音語・擬態語の形態論小考」(『国語学』第一一五集、一九七八年一月)、中里理子『泣く』『涙』を描写するオノマトペの変遷」(『上越教育大学研究紀要』第二四巻第一号、二〇〇四年九月)等は、「さめざめ」をオノマトペとして認定している。一方、日向茂男・笹目実「語形から見た擬音語・擬態語Ⅱ」(『東京学芸大学紀要(人文科学)』一九九九年二月)は『おそろおそろ』『さめざめ』『こわごわ』の三語については、擬音語・擬態語であるかどうかの認定に問題のあるところである」と述べ、認定には否定的である。また鈴木雅子「擬声語・擬音語・擬態語」(『研究資料日本文法 四』明治書院、一九八四年九月)も「反復で下が濁音化した語(カルガル、クログロ)は普通擬声語には含めない」としているが、「連濁をおこさない行の場合はどうか」と認定基準の困難さを指摘している。さらに大坪併治『擬声語の研究』(明治書院、一九八九年二月)も「連濁するかしないかは、その語が擬声語かどうかを識別する目安の一つである」と述べ「擬声語は

連濁を起こさないのが原則」としているが、「まれに連濁して用いられるものがある」例外として「サメザメ、ホノボノ」の二語を挙げている。

(21) 寛壽雄「一般語彙となつたオノマトペ」『月刊言語』第二二卷第六号、

一九九三年六月

(22) 田守育啓「日本語オノマトペの『語彙性』および『オノマトペ度』に

関する実証的研究」(神戸商科大学『人文論集』三五卷二・三号、二〇

〇〇年一月)

(23) 西尾寅弥『現代語彙の研究』(明治書院、一九八八年七月)

(24) 天沼寧『擬音語・擬態語辞典』(東京堂出版、一九七四年十二月)

(25) 浅野鶴子『擬音語・擬態語辞典』(角川書店、一九七八年四月)

(26) どの語を擬音語・擬態語と認定するか判断の困難さに関しては、渡辺実「象徴辞と自立語——音と意味(一)」『国語国文』第二一卷第八号、一九五二年八月)、日向茂男「擬音語・擬態語」『講座日本語と日本語教育』七、明治書院、一九九〇年二月)、城生伯太郎「連想とオノマトペ」『日本語学』第二二卷第九号、一九九三年八月)、加藤久雄・坂口昌子「後接成分とオノマトペの性質について」『奈良教育大学紀要』第四五卷第一号、一九九六年)など多数の先行研究によって指摘されている。

(27) 漢語の擬音語・擬態語の語形分類は、金田一春彦「擬音語・擬態語概説」(浅野鶴子『擬音語・擬態語辞典』角川書店、一九七八年四月)の

一二、一三頁を参考にした。